

第四十節の隠された歴史——第十九番

第二の災い — 第六部

Jeff Pippenger

2026-07-20

ダニエル書と黙示録は相互に補完し合っており、すなわち、両者が共にあって完全なものとなるのである。

「黙示録において、聖書のすべての書は集結し、ここに終結する。ここにダニエル書の補完がある。」『患難から栄光へ』585ページ。

聖書の預言における諸王国こそ、預言を学ぶ者の関心の中心でなければならない。なぜなら、終わりの日の外的歴史は、主としてそこに提示されているからである。

諸王国の興亡を支配する諸原因を、神の御言葉の光のうちに学ぶことは、はるかにまさっている。青年はこれらの記録を研究し、諸国民の真の繁栄が神の原則を受け入れることといかに不可分に結びついてきたかを見なさい。彼はまた、偉大な宗教改革運動の歴史を研究し、これらの原則がしばしば軽蔑され憎まれ、その擁護者たちが地下牢や断頭台に引き渡されたにもかかわらず、まさにこれらの犠牲を通して勝利を収めてきたことを見るがよい。」『教育』238頁。

「大いなる宗教改革運動」であれ、「諸王国の興亡」であれ、聖なる歴史は、神の御言葉において生死に関わる事柄である。パウロは第二テサロニケ人への手紙第二章において、真理を愛さず、そののちに強い惑わしを受ける者たちは、彼がその箇所では明示したメッセージを自ら退けることを選んだからこそ、そうなるのであると記している。その箇所は、異教ローマと教皇制ローマとの関係を明らかにしており、それはまたペルガモンとテアテラとの関係でもあり、さらに鉄と泥との関係であり、また竜と教皇制との関係でもある。テアテラによって表される教皇制ローマの興隆と、ペルガモンによって表される異教ローマの没落とは、強い惑わしを受ける者たちが憎む真理である。

ミラー派の歴史において、1843年の先駆者年表にまで持ち込まれた、ミラー派とプロテスタントとの間の論争は、ダニエル書11章14節における「あなたの民の強盗たち」として表されている歴史的勢力が何であるかをめぐるのであった。その強盗たちは、ミラー派が主張したように異教ローマの勃興であったのか、それともプロテスタントが唱えたようにセレウコス朝の没落であったのか。

「行動の舞台に登場してきたすべての国民には、『見張る者、すなわち聖なる者』の目的を成就するかどうかは明らかにされるために、地上にその位置を占めることが許されてきた。預言は、世界の大帝国——バビロン、メド・ペルシヤ、ギリシヤ、そしてローマ——の興隆と衰亡をたどってきた。これらのそれぞれにおいて、また力のより小さい諸国民においても同様に、歴史は繰り返された。各々には試みの時期があり、各々は失敗し、その栄光は色あせ、その力は去り、その位置は他のものによって占められた。……」

「聖なる御言葉の頁に明らかに示されている諸国民の興亡から、彼らは、単なる外面的・世俗的栄光がいかに空しいものであるかを学ばなければならない。バビロンは、そのあらゆる権勢と壮麗さをもって——そのような権勢と壮麗さは、それ以来この世界がいまだかつて見たことのないものであり、また当時の人々にはそれがいかにも堅固で永続するもののように見えたのであるが——、それがどれほど完全に過ぎ去ってしまったことであろうか。『草の花』のように、それは滅び去ったのである。神をその土台としないすべてのものも、このように滅び去る。ただ、神の御目的と結びつき、神の御品性を表すものだけが存続しうる。神の諸原則こそ、この世界の知る唯一の不変のものである。」『教育』177, 184.

聖書の歴史とは、ソロモンが、これを欠くならば滅びると述べたところの幻である。ミラ一派は、黙示録第九章五節および十節において「五か月」として表されている百五十年を認識し、これを宣べ伝えた。しかし彼らは、黙示録第九章に表されている歴史を深く掘り下げることはしなかった。彼らは十節の五か月を正しく特定したが、明らかに、五節と十節の双方に「五か月」という表現が含まれているため、それは単に、両節に表されている苦しめの預言を強調しているにすぎないと考えたのである。今や容易に証明し得るように、五節が「五か月」を表すとき、それは西暦632年のムハンマドの死に始まり、ビザンツ帝国、すなわち東ローマ帝国の女帝イレネーの屈辱をもって782年に終わる百五十年を表している。

先駆者たちは、第十節を、1299年7月27日のニコメディアの戦いを起点とし、1449年7月27日にコンスタンティノープルで統治した最後のコンスタンティヌスの屈辱をもって終結する百五十年の期間として適用した点において正しかった。逐次の証言により、百五十年の期間は、第一の災いであるアラビアのイスラムと、第二の災いであるトルコのイスラムの双方によって表される、世界的イスラムを明示している。皇帝と皇后の双方を辱めたそのイスラムは、イレネーによって表される女と、最後のコンスタンティヌスによって表される男とから成る王国を、世界的イスラムが征服することを示している。

イレネーの屈辱をもって終わる百五十年の期間において、アラビアのイスラムはビザンティンの地域、すなわち領土を支配下に置き、イレネーをきわめて屈辱的な立場に追い込み、その結果、彼女は三年間、他の苛酷な取り立てに加えて貢を納めることを余儀なくされた。最後のコンスタンティヌスの屈辱が生じたとき、それは東ローマの首都の包囲と転覆をもって終わる四年間の期間の始まりを画した。いずれの場合も、それはイスラムであり、イレネーに対してはアラビアのイスラムであり、最後のコンスタンティヌスに対してはトルコのイスラムであった。終わりの日においては、第一と第二の災いのうちに示されたアラビアのイスラムとトルコのイスラムという二人の証人によって表される世界的なイスラムが、まず領土を奪い、次いで首都を奪うであろう。東ローマのコンスタンティヌスによって表される終末時代の政治的実体は、東ローマのイレネーによって表される終末時代の宗教的実体と、象徴的に結ばれている。私が政治的実体および宗教的実体という語を用いるのは、獣の像の象徴がまずアメリカ合衆国に現れ、そののち世界に現れることを示すためである。獣の像とは、コンスタンティヌスとイレネーの象徴的婚姻であり、彼らはともに、イスラムに領土と首都を奪われることによって辱めを受けるのである。

両者の結婚は、二つの歴史を対比して一致させることによって特定されるのであり、それは、ミラノ勅令が施行され、象徴的なスミルナの教会が終わって象徴的なペルガモンの教会が始まった313年におけるコンスタンティアとリキニウスの結婚によって予表されていた。パウロが強い惑わしを受ける者たちとして示している人々は、不法の者が現される前に背教があることを含む、パウロの警告のメッセージを見ようとしなさい。その背教はペルガモンの歴史の中で起こり、不法の者は538年に現され、その時テアテラの教会が始まった。

だれにも、どのような手段によっても欺かれてはなりません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、その日は来ないからです。彼は、神と呼ばれるすべてのもの、また礼拝されるすべてのものに反抗し、自らをそれらの上に高く掲げ、その結果、自分こそ神であることを示して、神の宮に座するのです。テサロニケ人への第二の手紙 2:3, 4.

東ローマの歴史は、東ローマと西ローマとの象徴的關係にも表されている預言的真理について、二人の証人を提供している。その關係において、西ローマは教会であり、東ローマは国家である。ローマは、ダニエル書第二章において鉄と粘土として表象されているように、教会と国家との結合体である。

終末の時代において、世界的なイスラムが、教会と国家の結合として表象される勢力に攻め寄せ、その領土と首都を奪うことが説得力をもって見て取れる一つの理由は、黙示録第九章の聖なる歴史から得られる他の二つの証言によって裏づけられている。オスマンは1299年7月27日にニコメディアの領土を征服し、その後二年後の1301年にニカイアの領土を征服した。彼の子は1331年に首都ニカイアを征服し、同じその子が、1337年に終わった四年にわたる包囲戦によって首都ニコメディアを征服した。先駆者たちは1299年7月27日をオスマンとともにしるしづけたが、次の戦い、すなわちニカイアの戦いを、オスマン帝国確立への歴史的な第二段階として見ることは決してなかった。1299年7月27日は、日曜法に至るためのいくつかの段階の第一段階であった。トルコのイスラムの最初の二つの段階は、1449年に終わり、次いで1840年に、さらに9・11に、そしてさらに2023年12月31日に再び終わった一つの預言の始まりを示していた。

それら二つの段階の最初のものは、百五十年の始まりを画しただけでなく、三十八年の始まりをも画した。それは、オスマンがニコメディアの領土を奪取したことに始まり、三十八年後、四年に及ぶ包囲の末、一三三七年にオスマンの子がニコメディアの首都を奪取した時に終わった。三十八という数は「立ち上がり」を表しており、オスマンがその領土を奪取した最初の段階は、トルコ・イスラムの立ち上がり画した。この三十八年の最初の段階においては、「四年」の包囲がその結末を示している。百五十年の最後の段階において、辱めがもたらされ、そしてその四年後の一四五三年に、東ローマの首都が奪取される。

1453年のオスマン・トルコ人であれ、あるいはオスマンの子が1337年にニコメディアを、1331年にニカイアを併せて奪取したことであれ、この三つの事例のいずれにおいても、それぞれの首都は歴史上のある時点で東ローマの首都として機能していた。これら三つの系統はいずれも、東ローマの征服を示している。これら三つの系統のそれぞれは、イス

ラムがまずその領土を、続いて東ローマの首都を征服することを示している。三つの首都すべての名称は、その領土の名称と同一である。これら三つの系統のそれぞれには、明確なアルファとオメガの歴史的人物が存在する。皇帝と皇后の双方がイスラムによって辱めを受けるという教会と国家の関係を示しつつ、その預言的な辱めは、330年にコンスタンティヌス大帝がローマの都よりもコンスタンティノープルを選んだとき、同じく彼によって辱めを受けた西ローマと、それらの系統を結び合わせている。西ローマの最後の辱めは、最後の皇帝とともに476年に到来し、その時以後、急速に衰退し続けた。

東ローマに対する西ローマは教会であり、東は国家であった。330年における初めの辱め、それから476年、さらに782年、そして再び1449年における辱めである。一つの王国の分裂に始まる辱めの系譜があり、続いて476年には皇帝、したがって帝国を失うという辱めがあり、その後、イスラムがまず782年に東方の領土にもたらした辱め、さらに1453年には東方の首都にもたらした辱めが続いた。

聖書預言におけるイスラムは、東ローマと西ローマの双方の系譜を明るみに出すものであり、また今日イスラムが生み出している光は、ミラー派の先駆者たちにとってイスラムの基礎的な光であったものと一致しているが、それをはるかに超えるものである。2024年に、「幻を確立するあなたの民の強奪者たち」とはだれか、ということをもって始まった試みの時は、その試験期間のアルファであり、そして今、その試験期間の終わりにおいて、黙示録第九章のイスラムという主題からの光が、これら現在の終わりの日々に至るまで一度も評価されることのなかった西ローマと東ローマの証人たちを付け加えるのである。

第九章から第十一章に表されているイスラムの預言的系譜は、ダニエル書第十一章十節から十六節に位置づけられている歴史の系譜を、これらの記事においてすでに論じられている系譜と結び付く証言を提供することによって、一つに結び合わせている。だが、イスラムの興隆に関する預言的挿図の中には、ミラー派の運動と十四万四千の運動の双方の興隆も含まれている。黙示録第九章の時の預言の中に、しかもその一部として確固として置かれた二つの四年の期間は、1840年から1844年に至る四年間について証ししている。1844年には、もはや預言的時間は存在しないので、その象徴的な四年の期間は、時間によってではなく、その預言的特質によって規定される。第一の四年の期間は、彼の父がその領土を征服してから三十八年後の1337年に、イスラムが旧東ローマ帝国の首都ニコメディアを征服したことを示している。第二の四年は、1449年における東ローマの政治的および宗教的支配者たちの屈辱を示しており、それはイスラムによってもたらされたものである。そして第三の四年は、その栄光をもって地を照らした御使いが1840年8月11日に降ったときの、神の力の栄光ある顕現を示している。

第一天使および第二天使のミラー派の歴史は、十四万四千人の印する働きの期間における第三天使の歴史と一致している。その最後の印する働きは罪の抹消であり、それは神性と人性との結合であって、イスラムによってもたらされつつある戦争のただ中で起こる。

彼は底知れぬ穴を開いた。すると、その穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、その穴の煙のゆえに、太陽も空気も暗くなった。さらに、その煙の中から、いなごが地上に出て来た。そして彼らには、地のさそりが持つような力が与えられた。彼らは、

地の草も、どんな青いものも、どんな木をも害してはならず、ただその額に神の印を持たない人々だけを害するように命じられた。黙示録 9:2-4

あらゆる預言の完全な成就是終わりの時代にあるので、この箇所は十四万四千人の印を押されることを示している。黙示録第九章におけるイスラムの預言は、イスラムが抑止された一八四〇年八月十一日に頂点に達した歴史の中で、その幻を確立する力の最も完全な実例を結び合わせるための歴史的鍵を提供している。その時点から、黙示録第九章の証しは第十章および第一天使と第二天使の歴史へと延びていく。そして第十一章では、第三の災いが日曜法において突如として到来するが、その時こそ第三天使の大声が始まる時である。第九章は、ダニエル書と黙示録に示されている諸王国の興亡を組織立てるうえでのイスラムという鍵である。第十章と第十一章は、十四万四千人の賢い処女たちの経験を明らかにしている。第九章は外的な幻を確立する象徴を示し、第十章と第十一章は、子羊に従って至聖所へ入ることに関連する内的な幻を示している。

黙示録第十章は、開かれた小さな巻物を携えて降って来る力ある御使いとしてのキリストをもって始まる。その出来事は、三百九十一年と十五日を示す黙示録第九章の預言の終結において、1840年8月11日に成就した。黙示録第十章は、その後の歴史を、ヨハネの腹においてそのメッセージが1844年10月22日に苦くなるに至るまで示している。1840年から1844年までの四年間は、第一の御使いの到来をもって始まり、第三の御使いの到来をもって終わる。1840年8月11日の成就の後に続いたその四年間は、三百九十一年と十五日の始まりにおける1449年7月27日から1453年に至る四年間によって予表されていた。これら二つの四年間はいずれも、1333年から1337年に至るニコメディア包囲の四年間と一致している。象徴的に、東ローマはイスラムによって三度征服された。第一は1331年のニカイア包囲において、次いで1337年のニコメディアの四年間の包囲において、そしてさらに1453年のコンスタンティノープル包囲においてである。

ディオクレティアヌスは393年に法的にローマを東西に分割し、コンスタンティヌスは330年に預言的にローマを東西に分割した。395年、皇帝テオドシウス1世の死に際して、帝国は、彼が東方と西方を二人の息子に遺したことにより、正式に、かつ恒久的に分割された。カトリック教会は、1054年の「大分裂」において東西に分裂した。その分裂は、その後に続いた衰亡と同様、漸進的であった。その分裂はまさに今日に至るまで存続している。その時から五十年以内に、ローマの西方教会は、イスラムに対するおよそ二百年に及ぶ十字軍を開始した。西ローマは476年に最後の皇帝を失った時に滅びた。東ローマは1453年に滅びた。教皇ローマは1798年に滅びた。異教ローマは393年、330年、および395年に東西へ分割された。教皇ローマは1054年に東西へ分割された。ホワイト姉妹は、神の御言葉の研究における主要な準拠点として、諸王国の興隆と衰亡を特定している。

黙示録第九章から歴史の光の中へと引き出される諸王国は、その幻がローマによって確立されるという論証を強める。イスラム教と十四万四千人との間の預言的連関は、ろばに乗ってエルサレムに入城されたキリストによって予表された真夜中の叫びの使命が、第一の災いの時代に始まり、預言の第二の部分において第二の災いの中で継続し、さらに、そのまさにその預言の成就をもって第一天使と第二天使のミラー派運動が始まった四年間の歴史の中で成就に至った時の預言によって表されていることの証拠である。その預言は、イスラム教の興隆を示す「三十八と二年」（1299年および1301年）という象徴を

もって始まり、ミラー派の興隆を示す「三十八と二年」（1838年および1840年）という象徴をもって終結した。

1844年に、1333年から1337年に至る包囲、および1449年から1453年の包囲により予表されていたミラー派の四年間の期間の終結において、もはや預言的時は適用されるべきではなかった。十四万四千人の旗が掲げられることは、イスラム教が掲げられる預言と直接結び付けられている。

ユダよ、あなたはあなたの兄弟たちにほめたたえられる。あなたの手はあなたの敵の首にかかり、あなたの父の子らはあなたの前にひれ伏す。ユダは獅子の子。わが子よ、あなたは獲物を得て上って来た。彼は身をかがめ、雄獅子のように、また老いた獅子のように伏す。だれがこれを起こしえようか。笏はユダを離れず、立法者はその足の間を離れない、シロが来る時まで。もろもろの民の従うのは彼である。彼はそのろばの子をぶどうの木につなぎ、その雌ろばの子をえり抜きのぶどうの木につなぐ。彼はその衣をぶどう酒で洗い、その服をぶどうの血で洗う。その目はぶどう酒によって赤く、その歯は乳によって白い。創世記 49:8-12。

十四万四千人はキリストの品性を完全に反映しており、またキリストは、他の象徴的表象の中でも、「えり抜きのぶどうの木」である。イシュマエルは創世記16:12において「野生の」人として示されている。

彼は野生のろばのような人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手も彼に逆らうであろう。彼はすべての兄弟たちの前に住むであろう。

「野生」と訳されている語は、アラビアの野ろばである。終わりの日におけるキリストの代表者たちは、アラビアの野ろばのメッセージ、すなわちキリストがエルサレムへ乗って入られたろば、そしてバラムが三度目にこれを打った後についに語ったろばのメッセージに乗るのである。1840年に第一天使の使命に力を与えたそのメッセージは、その運動に力を与えたメッセージが置かれていたまさにその預言的歴史の中に、関連性があり重要な百五十年の預言があることを見なかった。彼らは、まさにその同じ時の預言の中に、1840年から1844年までの歴史を予表する二つの四年期間を見なかった。ユダ族の獅子は今、「古い道」から、これまで一度も見られたことのない光を開いておられるのであり、それは2023年12月31日以来開かれつつあるその光と一致する光である。それは、ナッシュビルを打つのがイスラムであるかどうかについての、いかなる疑念をも取り除く。その光はローマの象徴を照らし出し、それによって2024年における「あなたの民の強奪者たち」をめぐるアルファの論争に対するオメガの陳述となり、またミラー派の歴史におけるまさに同じ象徴をめぐる議論に対するオメガの象徴ともなる。それは、黙示録第九章の時の預言におけるイスラムが、十四万四千人の封印の時の内部の歴史の期間における外的メッセージであることを明らかにする。私たちはこの事実をしばらくの間教えてきたが、今やそれは黙示録第九章に始まり黙示録第十一章に終わる一本の線の上において実証することができる。1840年から1844年に成就したイスラムの時の預言に結び付く第三の四年期間は、十四万四千人の封印の時を例証している。黙示録第十一章の大地震によって、十四万四千人は旗印として高く掲げられるのである。

エゼキエル三十七章において、神の民が軍勢として起こされることは、アダムの創造によって予表されていた二段階の過程である。まずアダムは土くれから形造られ、次いでキリストが彼に命の息を吹き込まれた。エゼキエル書においては、第一の預言が死体を形作るが、それらはなお死んだままである。次いで、四方の風がその死体に吹きかけられ、彼らは強大な軍勢として立ち上がる。三十八と四十という数は、この二つの段階を表している。

これらの事柄については、次の記事で引き続き述べることにする。

この後、ユダヤ人の祭りがあり、イエスはエルサレムに上られた。さて、エルサレムには羊の門の近くに池があり、ヘブル語でベテスダと呼ばれ、五つの回廊があった。その中には、目の見えない者、足なえ、やせ衰えた者など、病人の大ぜいが、水の動くのを待って横たわっていた。というのは、ある時になると御使いが池に降りて来て、水をかき乱したのであり、その水がかき乱された後で最初に入った者は、どのような病にかかっているか知らず、いやされたからである。そこに三十八年も病をわずらっている一人の人がいた。イエスは彼が横たわっているのをご覧になり、また、すでに長い間その状態にあることを知って、彼に言われた、「あなたは、いやされたいか。」病人はお答えした、「主よ、水がかき乱されるとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」イエスは彼に言われた、「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」すると、その人はただちにいやされ、床を取り上げて歩いた。その日は安息日であった。ヨハネ 5:1-9。

「今、立ち上がってゼレデの川を渡れ」とわたしは言った。そこで、わたしたちはゼレデの川を渡った。カデシ・バルネアを出てからゼレデの川を渡るまでの期間は三十八年であった。ついに、主が彼らに誓われたとおり、戦うことのできる世代の者はみな宿営の中から滅び尽くした。申命記 2:13, 14。